

氏名(本籍)	坂上 真理 (北海道)
専攻分野の名称	博士 (社会福祉学)
学位記番号	博第2号 (甲第2号)
学位授与の日付	平成19年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文題目	高齢期リロケーション研究における「場所」の構築過程の検討 ーケアハウス入居者を情報提供者とした質的研究ー
論文審査委員	主査 北星学園大学教授 砂子田 篤 副査 北星学園大学教授 米本 秀仁 (指導教授) 副査 北星学園大学教授 今川 民雄 委員長 北星学園大学教授 杉岡 直人 (社会福祉学研究科長)

博士論文審査要旨

坂上真理氏 (以下筆者と記す) の学位請求論文「高齢期リロケーション研究における『場所』の構築過程の検討ーケアハウス入居者を情報提供者とした質的研究ー」は、作業療法士としての長年の臨床経験に基づく詳細かつ入念な分析から、リロケーションという人生の危機への対処のあり方について、「場所」といった新たな概念を導入しながら実証的に検討し、高齢期における居住支援について新たな方向性を提起したものである。

一 本論文の構成

本論文は、以下のように構成されている。

目次

序章

第1節 本稿に係る背景

第2節 本稿の目的

第3節 本稿の構成

第1章 高齢期リロケーション研究と「場所」概念を用いた検討の意義について

第1節 我が国における高齢期の特徴

1. 見本なき高齢期とライフサイクルの変化
2. 高齢期の住まい方と移動実態
3. 我が国における高齢期居住施策の変遷
4. 現在の高齢期の住まい

第2節 高齢期のリロケーション研究と「適応」概念の再考

1. 高齢期のリロケーション研究の再考

2. 適応概念の再考
3. リロケーション研究と「適応」概念

第3節 場所論の省察と「場所」の定義

1. 場所概念の多義性
2. 場所と空間の経験
3. Uexkullの環世界とその多元性
4. 本稿における「場所」の定義

注釈

第2章 質的研究方法の選択理由と調査設計

第1節 質的研究の特徴と選択理由

1. 質的研究の特徴
2. 質的研究の採用理由
3. 代表的な質的研究方法
4. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの採用理由

第2節 本稿調査における調査設計

1. 本稿調査の研究設問
2. 本稿調査におけるデータ収集方法
3. 本稿調査におけるデータ分析方法
4. 倫理的配慮
5. 質を高めるための戦略
6. 本稿調査が目指す到達点

第3章 ケアハウス入居者の「場所」の構築過程

第1節 構造的側面からみた情報提供者の場所

1. 領域分類からみた情報提供者の場所
2. Aケアハウスの概要と変遷

第2節 ケアハウス入居者の3つの「場所」

1. 「馴染みの場所」
2. 「受けとめられる場所」
3. 「与え合う場所」

第3節 3つの「場所」の構築と喪失の過程

1. 「受けとめられる場所」における専門的な職員達
2. リロケーションによる入居者達のギャップ—自己のゆらぎ—
3. 「与え合う場所」の構築における成員の変化—入居高齢者から〇〇さんへ—
4. 「受けとめられる場所」の変遷—職員から〇〇さんへ—
5. ケアハウス内における「馴染みの場所」の構築
6. 施設からの脱出—〈「場所」の漂流〉—

第4節 3つの「場所」を構築した典型事例の紹介

1. 事例の選択理由とデータ収集・分析方法

2. 荒川さんの紹介と著者との関係

3. 荒川さんの「場所」の構築過程

第4章 考察と結論 – 「場所」の構築過程検討の成果と高齢期の居住支援への提言 –

第1節 本稿調査の成果と考察

1. 「場所」の構築過程の特徴

2. リロケーション先行研究との対比からの考察

第2節 本稿のまとめと今後の居住支援への提言

1. 本稿のまとめ

2. 今後の高齢期居住支援への提言

二 本論文の概要

本論文は、リロケーションを体験した高齢者の個別的で質の高い生活を支える今後の居住支援へ新たな示唆を得ることを目的としている。ここでは、高齢者が自分らしい生活を継続するには、鍵となる「場所」が存在すると仮定し、ケアハウスへリロケーションした高齢者の「場所」の構築過程を、質的研究法（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）により4年間縦断的に追跡調査を実施している。

本論文は4章から構成されている。

第1章では、本論文の中心概念である「場所」の定義と、この概念を用いて高齢期のリロケーション後の過程を検討することの必要性および重要性について述べられている。すなわち、これまでの高齢期リロケーションとその概念的基礎とされてきた「適応」概念の定義をレビューし、高齢期リロケーション研究における到達点と課題を明らかにするとともに、「場所」という概念を用いることの意義について提示している。そして、「場所」の定義に際して、Uexkullの理論を引用しながら、「場所」を客観的な環境の属性として説明される現実的な場所と、主観的に認知される想像的な場所の両者が有機的に関連する多次元的なものとして定義している。

第2章では本論文の調査に用いられている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴と選択理由について記述されている。すなわち、シカゴ学派により構築されてきている質的研究法およびそのパラダイムについてレビューし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの位置づけと特徴を明示しながら、その選択理由について詳細に記述されている。さらに、この手法に基づいて、ケアハウス入居者を対象者とする調査デザインが具体的に述べられている。

第3章では、調査によって得られた結果とともに、ケアハウス入居者のリロケーション後の「場所」の構築過程について記述されている。すなわち、入居者にとって自分らしい生活を継続するための鍵となる「場所」の意味、それらの「場所」の構築条件、そして「場所」の構築パターンや時間的変容について分析されている。

第4章では、前章で得られた結果を先行研究によって再確認し、「場所」の構築過程に関

する仮説モデルが提示されている。具体的には、本論文では鍵となる3つの「場所」が見出され、これらの「場所」とは、「馴染みの場所」、「受けとめられる場所」、「与え合う場所」であるが、3つの「場所」は、主体、物理的な場所、その場所を共有する成員、そして主体と成員達の行為や活動が空間的・時間的文脈性を帯びながら互いに織り合うことにより、構築されていると指摘している。また、これらの「場所」の構築にあたっては、「場所」の構築に関わる要因との日常的な接触を通じた、探索が重要であるとされ、探索を繰り返すことによって、構築条件間の親和性を見出し、「場所」の意味を付与できるか否かが、「場所」の構築を決定づけるものと推論している。これらの考察から、「受けとめられる場所」は、入居者の受動的な関係の特徴とし、この「場所」を管理する成員によって偶然に構築される不安定な「場所」であり、「与え合う場所」は、互酬的な双方向の関係を特徴とし、「馴染みの場所」はそこに関わる成員全てが能動的な立場をとり、その構築は定例化していることが多く、安定して構築されていると結論づけている。さらに、このような議論を踏まえながら、高齢期における今後の居住支援について、個別性を尊重した居住支援を展開するためには、予め固定化された物質的な場所、成員、活動を提供するのではなく、探索しながら構築していく創出の過程を重視した支援の必要性を指摘している。

三 本論文の評価

以上に要約された坂上真理氏の論文は、審査委員会として以下の点について高く評価しうるものとした。

1. 国内外（本邦および北米）におけるリロケーション研究について老年学、老年社会学および建築学など広範にわたる学問領域における文献を丹念に整理かつ検討しながら、高齢期のリロケーションにおける「適応」の概念の再考の必要性を強調し、「場所」という新たな概念の導入によりリロケーション研究に新たな地平を切り拓いたと考えられる。
2. 高齢期におけるリロケーションに関する研究のレビューについて、リロケーションにおける outcome measure の妥当性や有効性についての論議とその背景にある「適応」の考え方について体系的に整理され、著者の新たな仮説の必要性および妥当性について提示されている。
3. 帰納的なアプローチとして長年シカゴ学派によって構築され、確立されてきている手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチにおける理論そしてそれらのパラダイムに関して整理され、本邦や北米における最近の動向についてもまとめられている。このような動向を踏まえながら、本論文において用いられている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの選択についての論理的な根拠も明確に示されている。
4. 「場所」という新たな概念導入に伴い、リロケーションにおけるその過程を分析するために質的研究法（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を選択し、ケア

ハウスに入居した高齢者を4年間縦断的に追跡調査を行った。それによって得られた膨大なデータを慎重かつ入念に分析することで、「場所」といった概念の妥当性および有用性について実証的に考察し、高齢期の居住支援のあり方に新たな方向性を提起したと考えられる。

ただし、審査委員からは、以下のような問題点や課題も指摘された。

1. 本論文において中核となる「場所」という概念の導入に際して、著者のこれまでの研究成果との関連についてより明確に提示することが必要である。
2. 本論文は、高齢期におけるリロケーションにおけるその過程に重点を置いた研究であるため、3つの場所への移行過程やその相互関連性などにより慎重な考察を加える必要がある。とりわけ、「馴染みの場所」構築過程についてその論拠と考察についてより詳細に提示する必要がある。
3. 本論文によって採択された質的研究法により実証的に得られた結論について、その一般化における過程すなわちその適用条件や限界についてより明確に提示する必要がある。

審査委員会は、高齢期におけるリロケーション研究における新たな仮説の提示という論文の成果を高く評価し、これらの課題等については今後の課題として展開されることを期待することで一致した。

以上の審査結果から、審査委員一同は、本論文が学位請求論文として学術的水準に十分に達していることを認め、更に口述試験の成績をも考慮して、坂上真理氏に、北星学園大学博士（社会福祉学）の学位を授与することが適当であると結論する。

学位請求論文最終試験の結果の要旨

2007年2月16日、学位請求論文提出者坂上真理氏の試験及び学力認定を行った。

試験において、提出論文「高齢期リロケーション研究における『場所』の構築過程の検討—ケアハウス入居者を情報提供者とした質的研究—」に基づき、審査委員が疑問点につき逐一説明を求めたのに対し、坂上氏は、論文執筆後の知見も踏まえて、いずれにも適切な説明を行い、審査委員の疑問を解消した。

専攻学術に関し、審査委員一同は、坂上真理氏は学位が授与されるのに必要な学力を有するものと認定した。